昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283 令和6年4月1日発行 第48巻第4号通巻559号

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

みんぱくは創設50周年を迎えます

月刊みんぱく 4月号 2024

特集

仮面と人

巻頭エッセイ 天堂 きりん

真っ白な紙に漫画を描く

天堂（てんどう） きりん
漫画家

今年一月末、漫画家の芦原妃名子（あしはらひなこ）先生が連載中の作品を遺（のこ）して旅立たれた。

彼女は原作ドラマの一件についての経緯を語り、漫画家をはじめ多くの人々が注目をしている中で命を絶った。

私もドラマ化の時に色々あったので多少なりとも芦原先生のご苦労は理解できる。

だけど、なぜ？　どうして芦原先生は死を選ぶまでに至ってしまったのか。

考えれば考えるほどに納得がいかなくて、しばらくは上の空で漫画原稿を描き終えた。

話は少し飛ぶが、私が芦原先生の名前を初めて知ったのは三〇年ほど前になる。

当時私は講談社の『別冊フレンド』に投稿をしていたが好きな少女漫画雑誌は『別冊少女コミック』で、彼女はそこで年に一度の新人漫画大賞の上から二番目の賞を受賞してデビューした。

同い年の女性が憧れの雑誌で大きな賞をもらっているのを見て正直羨ましかったし、強く意識したのをよく覚えている。

絵も可愛い、話作りも上手い。芦原先生の作品が掲載されている時は自然と目が追ってしまった。

その後、間もなくして私もデビューが決まり、漫画業界の端っこで生きることになった。

月日は流れ、特に芦原先生とも縁はなく、作品を追いかける事は少なくなったが「セクシー田中さん」のドラマが始まる前に作品のことを知り久々に芦原先生が描く世界を読んだ。

一言で言うとめちゃくちゃ面白かった。

過去最高に登場人物たちの個性が立っていて、それぞれの背景がしっかりと描かれ、練り込まれた話作りに同じ漫画家としてまたもや羨ましいと言う気持ちが湧き起こった。

馬鹿みたいな事を書くが、時間を戻せるなら漫画家全員で芦原先生が旅立つことを決めたあの場所へ行き彼女を全力で引き止めたい。

寒い中、一人きりで何を思い命を絶ってしまったのか、考えるだけで胸が張り裂けそうになる。

かつてモンキーパンチ先生がテレビで語っていた。アイデアが思いつかない時は頭の中の手拭いを絞って一滴出るか出ないかの中で話を作り出すのだと。

真っ白な所から物を生み出す作業はそう簡単な事じゃない。芦原先生は間違いなく魂を削って描いていた。読めばわかる。それくらい細部まで拘（こだわ）り抜かれ、漫画に対する愛を感じられる作品だった。

「セクシー田中さん」は惜しくも未完という形になったが、きっとこの先も彼女の世界に触れて救われる読者は後を絶たないことだろう。そして、そうであることを切に願ってやまない。

プロフィール
1974年大阪府生まれ。代表作『きみが心に棲みついた（S）』シリーズ（2018年実写ドラマ化）『そして、晴れになる』『アイヒアオの境界』『恋傷』など。現在、FEEL YOUNG（祥伝社）にて40代女性の主人公が引きこもりから脱出し便利屋で働く姿を描いた漫画『再生のウズメ』を連載中。

月刊 みんぱく
2024年4月号

表紙
油井の豊年踊りの紙面（かみめん）は頬を赤く、笑みをうかべた表情をしている（鹿児島県 奄美大島）

＊本文中、撮影者・提供者を記載していない写真は執筆者の撮影・提供によるものです。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

1 巻頭エッセイ
真っ白な紙に漫画を描く
天堂 きりん

特集 仮面と人

2 **日本の仮面とはなにか**
笹原 亮二

4 **出雲神楽を支えてきた貸出し屋**
品川 知彦

6 **奄美群島の紙面**
町 健次郎

8 **天下御免のメンドン**
佐藤 央隆

10 **メンドン大図解**

11 **仮面という魔法の「顔」**
スペル・デルフィン

12 みんぱく回覧板

14 推しコレ図鑑
鳥が居る
樫永 真佐夫

16 もっと、みんぱく
肌さむい収蔵庫
末森 薫

17 世界の「乗っちゃえ！」
海洋少数民族モーケンの船
鈴木 佑記

18 だって調査だもの
1997年夏、パレスチナ往還記
菅瀬 晶子

20 ぱくっ！とフィルめし
「カツオの狩人」の世界に迫る船上めし
若林 良和

21 今月号の地図・編集後記

特集

仮面と人

仮面はかりそめの顔をもつために、
物としてつくられ、置かれている。
木？　紙？　布？　いったいなにで？
これをかぶる者は、なにものかにたちまち変化し、
見る人も異世界へと誘われ、うつし世もかわる。
仮面のものの奥深さに、本特集では迫る。

西金砂神社の田楽舞の猿田彦（茨城県 常陸太田市、1991年）

御霊神社の面掛行列（神奈川県 鎌倉市、2023年）

みんぱく創設50周年記念特別展

日本の仮面――芸能と祭りの世界

会期：2024年3月28日（木）～6月11日（火）　場所：特別展示館

日本の仮面とはなにか

笹原亮二　民博 教授

いちおう伎楽がはじまり

「日本の仮面」と聞いて人びとがまず思い浮かべるのは、現在も古典芸能として演じられる舞楽や能狂言の面ではないだろうか。それに伎楽の面を加えれば、確かに、古代から現在に至る仮面の歴史を一応たどることも可能である。

六世紀に朝鮮半島から仏教とともに伝来し、宮中や大社寺の祭儀の荘厳の芸能として演じられるようになった伎楽の面。伎楽にやや遅れて海外から伝来した芸能や国内の芸能を整理して構成され、伎楽に代わって演じられるようになった舞楽の面。中世、社寺の祭りや行事において猿楽座が演じ、その後は時の権力者の庇護を受けて大成し、江戸時代には武家の式楽となるに至った能の面や、能とともに演じられるようになった狂言の面といった工合である。

1：槻の屋神楽（島根県 雲南市、2018年）
2：稲佐神社のくんちの獅子舞（佐賀県 白石町、2013年）

祭り、芸能からプロレスまで

しかし、その一方で、そうした理解のみで十分かという疑問も湧いてくる。その時々の政治、経済、宗教などさまざまな分野で突出した力を有した権力者や文化人などの一部の人びとや、彼らが集住した都などの一部の地域をもって「日本」とみなすならば、そんな理解も一定の妥当性が認められよう。しかし、いつの時代にあっても、そうした人びとや地域の周囲には大勢の人びとや彼らが暮らす多くの地域が広範に存在し、それぞれ独特の歴史や文化をつむいできた。そして、それらの地域にも多種多様な多くの仮面が存在してきたことは、現在も全国各地に伝わる芸能や祭りを見れば明らかである。

となると、前述のような日本の仮面の理解が決して十分とはいえなくなってくる。

例えばそれは、面をつけて神々の祭りの場への出現を演じる神楽、面をつけて他界から訪れる神霊に扮し、人びとに福を授けてまわる「マレビト」の祭り、面をつけて神輿の行列に加わり、道々を浄めて行列を先導したり、異様な風体で行列を華麗に彩ったり、各所で芸能を演じたりする神幸の祭り、仏や菩薩の面をつけて臨終に臨んだ人を極楽から迎えにくる様を演じる練供養、さまざまな人物の面をつけてさまざまな踊りや物語を演じる狂言や芝居など、全国各地の仮面が登場する芸能や祭りは枚挙にいとまがない。さらに、各地の祭りのお面売りの屋台やプロレスの仮面レスラーも視野に収めると、その多様性は一層際立ってくる。

ふたつと同じ表情がない

こうしたふたつと同じ表情がない全国各地の多種多様な芸能や祭りの仮面を前にすると、日本の仮面を一言で定義することがいかに困難かがわかってくる。それを踏まえて日本の仮面をどのように理解できるのか。特別展では、全国各地の多種多様な仮面を通じて、日本の仮面とはなにかを考えてみたい。

3：上鴨川住吉神社神事舞（兵庫県 加東市、2023年）
4：千本ゑんま堂大念佛狂言（京都府 京都市、2023年）

出雲神楽を支えてきた貸出し屋

品川知彦　前島根県立古代出雲歴史博物館 学芸部長

出し屋である。現在、出雲市域で四軒確認されているが、そのうちの一つが林木屋である。

林木屋には神楽面二三六面、衣裳三〇七点などが伝わる。面は林木屋の勝部豊市（一八三一～九七年）の手によるもので、遅くとも明治八（一八七五）年に製作され始めた。また姫役が頭の上にのせる天冠が明治一二年に準備されており、明治初年ごろには貸出し業を営んでいたことがわかる。昭和三〇年代には、見々久神楽（出雲市見々久町）など少なくとも出雲市域一一神楽団体に貸出し、出雲の神楽を側面から支えていた。

林木屋の神楽道具

面や衣裳など神楽道具一式を専門に貸出す業者が、出雲にあったし、今もあることをご存じだろうか。明治初期、政府の方針によりそれまで神楽を舞っていた神職が演舞を禁じられた。このため、氏子を担い手とした新たな神楽団体が多く結成されたが、神職から受け継いで間もない団体には面などの神楽道具が不足した。ここで生じたのが貸

林木屋の神楽面。一部の神楽面を除いて現在、島根県立古代出雲歴史博物館に寄託されている（2017年、勝部一郎氏蔵［林木屋コレクション］）

失われた演目

林木屋の神楽面には、使用される演目や役名が墨書されている。例えば武甕槌が六面、経津主が九面伝わっており、この面の状況から国譲り神話を舞う「荒神」は当時も人気の演目だったことがわかる。このように林木屋の資料から、演目の人気度など、神楽台本のみではわからない明治前半期の出雲神楽の状況が推察可能なのだ。また、現在までに途絶えた演目もわかる。そのうち三つを紹介しよう。

「佐陀」

旧暦十月、出雲に神々が集うと伝承されるが、その由来など松江市にある佐太神社の由緒を語る演目。出雲大社への神集いを語る能「大社」を、佐太神社を舞台に改変したものである。「佐陀」は火守神社（出雲市宇那手町）の神楽台本（寛政五年）や、出雲大社のお膝元の大土地神楽（出雲市大社町）の古台本（大正一〇年以前）など多くの台本に載るが、現在、出雲市域ではほとんど舞われていない。一方、出雲大社を舞台とした神楽としての「大社」は、出雲市域の古台本には載らないものの、大土地神楽など多くの神楽で舞われている。林木屋および林木屋由来の面を用いる見々久神楽には佐田（太）老神面が各一面伝わる。一方、大国主面は五面伝わっており、明治時代以後、出雲大社への神集いがより浸透するにつれ、「佐陀」ではなく「大社」が舞われるように変化したと思われる。

「天ノ御中主」

天御中主はじめ造化三神が天地海を創成した由来を語る演目。近年、新しい台本が発見され、演目の内容が判明している。この演目は明治以前の台本には載らない。造化三神は明治初期ごろに重視された神格であり、明治政府が神道による国民教化を図った明治初期ごろに、創作された演目と推測できる。天御中主面は林木屋に二面、見々久神楽に一面伝わり、明治前半ごろには一定程度舞われていたことがわかる。

「和田隅」

伊弉諾に仕える大和田隅が悪神を退治する演目。面に「ワダツミ」と墨書があり、海神がかかわる「住吉」「白楽天」などの演目に使用されたと想定されていたが、「天ノ御中主」同様、発見された台本により、その内容が判明した。和田隅面は林木屋に四面、見々久神楽や、林木屋の面ではないが仮の宮神楽（出雲市大社町・中絶）にも各一面伝わっており、一定程度舞われていたことがわかる。

現在途絶えている演目の状況について触れてきたが、これ以外にも此花咲屋姫、岩長姫、猿、狐など演目の墨書がなく、使用演目が不明確な面も伝わる。一体どんな演目に用いられたのだろうか。想像をかき立ててくれるとともに、氏子たちが神職から引き継いだ当時の神楽の状況を伝えてくれるのが、林木屋の神楽資料なのである。

裏面の墨書
（島根県 出雲市、2017年、藤原宏夫撮影）

和田済／饐若彦（あめのわかひこ）

岩長姫／埴山姫（はにやまひめ）

経津主

武甕槌

猿（道化力）

狐。林木屋では、狂言面とも伝えられる

大国主

佐田老神／天ノ御中主／翁

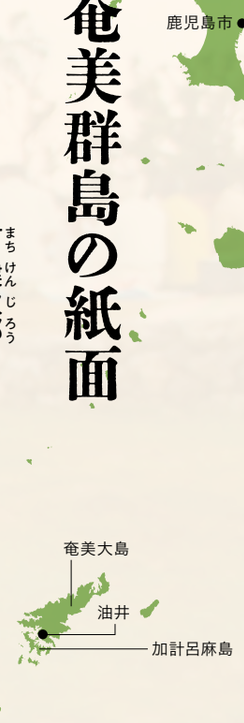
新羅王（しんらおう）

彦晴（ひこはる）の仕掛け。出雲神楽では鬼面に角などを用いず、大型の仕掛け面が用いられることが多い

勝部一郎氏蔵（林木屋コレクション）、島根県立古代出雲歴史博物館寄託・写真提供

奄美群島の紙面

町健次郎
瀬戸内町立図書館・郷土館 学芸員



奄美群島
（地理院地図を元に作成）

木よりも紙

日本に伝わる仮面といえば、能や神楽にみるように木彫りの「木面」が主流。しかし、そうでない地域もある。鹿児島と沖縄のあいだに位置する奄美群島では、紙を貼り重ねた「紙面」が主流。その紙面の世界を少しのぞいてみよう。

奄美群島の紙面は、旧暦八月一五日を中心としておこなわれる豊年祭などで披露される伝統芸能のなかに登場する。国や県の文化財指定を受けているものを北から順にあげると、奄美大島南部の瀬戸内町油井に伝わる「油井の豊年踊り」、同じく瀬戸内町の加計呂麻島に伝わる「諸鈍シバヤ」、奄美群島最南端の与論島に伝わる「与論十五夜踊り」がある。すべて、組まれた舞台上ではなく野外で群衆に囲まれるなかで披露されてきた。

これら紙面に注目してみよう。まず、作り方は大きく二つ。油井と諸鈍の紙面は、田んぼや川底の粘土で顔型となる土台を作る。その上に白紙を重ねて貼っていき、紙が乾いたら土台から外して色を塗っていく。一方、与論島では、細く割いた竹でザルを作るように骨格を整え、その上に紙を貼って顔を描き込むことから、泥型のような土台は存在しない。

上：油井の豊年踊りの紙面製作途中のようす
下：油井の豊年踊り保存会が挑戦した巨大紙面の土台。伝統にのっとり、これも田んぼの泥で作った
（どちらも鹿児島県 奄美大島）

目の穴、口の穴

形はどうだろう。唄やセリフがほとんどない諸鈍や油井の紙面は、踊り手の顔との密着度が高い平板的な作りになっている。一方、与論のようにセリフが多く狂言風の芸能だと、顔と接する内側に空気の膨らみが確保されているから、紙面の形状は丸みを帯びている。

目はどうだろう。紙面をかぶる人が外を見る目の穴の開け方は、油井と諸鈍はそのまま紙面の目をくりぬいて視界を確保しているが、与論のものは筆で描いた目を傷付けぬよう、それをさけてのぞき穴を設けた作りになっている。

口はどうか。油井は開いていてもわずかな隙間で、諸鈍と与論の紙面は穴が開いていない。これは呼吸がたいへんしづらそうである。当然ながら、セリフを周囲に響かせようとしたり、呼吸しやすくするには、アイデアとして紙面の口元を大きく開放させる方法もあったはずだ。しかしそうしなかったことで、目、口の穴を通して生身の人間が見えることが極力さけられる。つまり仮面がもつ最大の効果である〈変身〉に、ほつれがでないようにしているのである。

紙ゆえの親しみやすさ

木面が重厚感と緊張感を醸しだすのに対して、紙という素材の柔らかさと軽さゆえに、紙面には親しみやすい空気感がある。また、木面は神社などで恭しく何世代にもわたって宝物として保管されてきたことも少なくない。対して、紙面は傷むとその都度修復され、あっさりまるごと作り直される。さらに、紙素材は比較的自由に大きさを変化させることができる。油井では、高さ二メートルの紙面を作る試みがなされたこともあった（その完成品は集落公民館に飾ってある）。

日本の南に広がる奄美群島の紙面の世界。機会があればぜひ訪ねていただきたい。

上：油井の豊年踊りのオープニングを飾る演目「綱切り」。その先頭をしきる紙面（鹿児島県 奄美大島、2015年）
下：諸鈍シバヤの演目「ダットドン」。盲目の座頭役のため目を細く表現している（鹿児島県 加計呂麻島、2017年）

与論十五夜踊りの一場面。現在はマイクを通してセリフが響きわたる
（鹿児島県 与論島、2015年）

天下御免のメンドン

佐藤央隆 三島村教育委員会 事務局長

上：三島村硫黄島の空撮写真
下：海底から鉄分を含んだ温泉が湧出する硫黄島港。表層はさび鉄色をしている

薩摩硫黄島の八朔太鼓踊り

三島村は、鹿児島県本土と屋久島の中間の洋上に点在する三つの島で構成される小さな村である。硫黄島はその真ん中に位置し、かつて鬼界ケ島とよばれていた火山の島だ。

二〇一八年にユネスコ無形文化遺産に登録されたメンドンは、旧暦の八月一日と二日に硫黄島でおこなわれる八朔太鼓踊りに登場する天下御免の仮面神。祭りの二日間は島の少年にとって一年のうちでもっともワクワクする二日間だ。

八朔太鼓踊りは、カネタタッドン（鉦叩き）とよばれる唄い手と、それを囲む一〇名の男たちが、太鼓を叩きながら背中に背負った矢旗を振り回し、躰を大きく躍動させる勇壮な伝統行事で、中学生になると大人にまじって踊ることが許される。太鼓と矢旗を身に着けて四〇分も踊り続けるのはかなり大変だが、一人前の大人と認めてもらえる通過儀礼のようなもので、特に意中の子、または相手がいようものなら、その晴れ姿を見てもらいたいと大いに張り切る。

スッベンキで祓いまくる

そしてメンドンは、一日目の踊りの最中に突如としてあらわれ二日目の夜中まで延々と島中を徘徊し、島でスッベンキとよばれる神木の枝で観客の厄を祓う、何をしてもとがめられない神の化身だ——もちろん常識の範囲内だが。その出で立ちはバッテゴ又はヤッガヅラとよばれる面をかぶり、全身に藁と茅を編んだ蓑をまとってなかに誰が入っているか悟られないように手袋もはめる。

メンドンに入れるのも男のみで、誰が入っているのか詮索するのも御法度だからやりたい放題だ。とにかく、目についた人びとを片っ端からスッベンキで叩き散らすのである。優しく撫でてあげてもよいのではと思うだろうが、しっかりと祓ってあげるのがメンドンの使命。どういう訳か若い女性の場合は特に気合いが入るようで、逃げる後ろから必死に追いかけ力の限り使命を果たす。メンドンはとても責任感が強いのだ。

神の化身大暴れ

メンドンには男であれば小学生でも入れる。しかし、一五〇人にも満たない小さな島だから、誰が入っているのかおおよその見当は付く。大人たちは加減をするが、小学生くらいまでだと、そんなことはまったく考えない。なかには自分の母親に一目散に駆け寄っていって、スナップを効かせながら力の限り叩く強者もいた。彼はよほどうっぷんを溜めていたのか、念の入ったことに、葉がほとんど落ちて枝だけのものをわざわざ選んでいたような気がする。神の化身のすることだから、母親は何も言わずに叩かれていたが、家に帰った後のことを心配したのはわたしだけではあるまい。

今ではそうでもないが、わたしの小さなころのメンドンはとにかく暴れ回っていて、幼い子どもにとっては羨望と畏怖の対象だった。さらに遡るとむかしはもっとひどかったようで、その証拠に築一〇〇年近いわたしの実家には、母と叔母をメンドンから隠した秘密の部屋が作られている。

今でも秘密の部屋の隠し扉を見る度に、賑やかだったであろう硫黄島が思い起こされ、あの鉦のリズムを聴くと、ドキドキしながら踊った甘酸っぱい思い出と、見物客を追い回していた遠い記憶が甦り、歳甲斐もなくうずうずする。

左：太鼓と矢旗を体に密着させるため晒（さらし）できつく縛りあげ、パターンの異なる四つの踊りを繰り返す
右：突如踊りに乱入するメンドン。観客のボルテージも一気に上がる

左頁：矢旗を大きくしならせ、いかにダイナミックに見せるかが八朔太鼓踊りのポイントとなる

8〜10頁の写真はすべて鹿児島県 三島村 硫黄島、2019年、三島村提供

メンドン大図解

解説：佐藤 央隆

バッテゴ

赤と黒の渦巻き模様の丸い大きな耳、ひょうたん型の目、眉間の一本角など、南方系の特徴を色濃く残す仮面

子どもたちは大きなバッテゴではなく、身軽なヤッガヅラを被って厄を祓う

ヤッガヅラ

幼児を抱きかかえるメンドン。子どもにはすこぶる優しい

タタキダシ

メンドンと踊り子が海に向かって厄を落とすタタキダシ。これが祭りの締めとなり、ワクワクの二日間が幕を閉じる

スッベンキ

観客の厄を祓う神木の枝。食べ物や飲み物もお構いなしに観客を叩き散らす

仮面という魔法の「顔」

スペル・デルフィン

大阪府和泉市議会議員
プロレスラー

プロレスマスクの本場はメキシコ。
メキシコのアステカ文明も仮面だ。メキシコでは素顔を隠して戦う。
過去から現在までメキシコのレスラーはほとんどマスクを着用している。

ヒーローは素顔を晒さない。
世界でも古くはバットマンだし、
アベンジャーズもいろいろなキャラクターが仮面を被って戦う。
日本でも月光仮面や仮面の忍者赤影、
最近では仮面ライダーシリーズやウルトラマンシリーズ、
戦隊シリーズとヒーローは仮面。

人は子どものころから、仮面を着用している。
誰もが一度は仮面を作りお面を買い、
友達とヒーローヒロインごっこをした記憶があるハズ。
仮面は第二の人格になれ、着用する事でパワーが溢れ出す。

わたしがマスクを被る理由は、
子どものころからの夢「ヒーロー」になりたかったからだ。
憧れた最初のヒーローは仮面の忍者赤影。
忍者マスクと赤い仮面は自分で手作りした。
忍者赤影の革製の赤い仮面と
強化プラスチック製の黄金の仮面をコレクションしている。

被れる仮面ライダーマスクも多数コレクションしている。
幼稚園のころ見た仮面ライダーはいわゆる新一号が好きだが、
なかでも桜島一号が自分のヒーローだった。

わたしはプロレスラーになり「リアルヒーロー」にもなれ、
すでに三六年以上も仮面を被り続けている。
議場でも被れている。
家のなかには、自分のデルフィンマスクや
タイガーマスクの立体マスクなど一五〇枚はある。

仮面とはヒーロー、救世主を生み出す
人類にとって魔法の「顔」である。

スペル・デルフィン
（ブラックVer.、日本製）

スペル・デルフィン
（緑×シルバーVer.、日本製）

スペル・アストロ
（メキシコ製）

イホデル・サント
（メキシコ製）

みんぱく回覧板

イベントの詳細・予約はこちら

みんぱくホームページ
催し物のご案内
https://www.minpaku.ac.jp/event/

各イベントについて、詳しくはホームページをご覧ください。

みんぱく創設50周年記念特別展

日本の仮面
――芸能と祭りの世界

国内各地では、仮面をつけた役が登場する芸能や祭りがおこなわれてきました。本展示では、仮面と人びとの多様なかかわりについて紹介します。

会期　6月11日(火)まで
会場　特別展示館

上鴨川住吉神社神事舞（兵庫県 加東市）

■関連イベント
みんぱく創設50周年記念研究公演

千本ゑんま堂大念佛狂言民博公演

日時　4月14日(日)13時30分～16時15分(13時開場)
会場　みんぱくインテリジェントホール（講堂）(定員400名)
出演　千本ゑんま堂大念佛狂言保存会
解説　宮田勝行(千本ゑんま堂大念佛狂言保存会 会長)
司会　笹原亮二(本館 教授)
参加費　要展示観覧券(一般580円、特別展をご覧になる場合は一般880円)
※イベント参加費は不要
※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順
※事前申込の方へ、当日11時から本館2階会場前にて展示観覧券を確認後、入場整理券を配布します。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】
▼一般受付　4月10日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。

創設50周年記念みんぱく映画会

「島と人とメンドン」

日時　5月3日(金・祝)13時30分～16時30分(13時開場)
会場　みんぱくインテリジェントホール（講堂）(定員350名)
司会　福岡正太(本館 教授)
解説　藤岡幹嗣(監督／立命館大学教授)
座談会　藤岡幹嗣(監督／立命館大学教授)、徳田保(硫黄島八朔太鼓踊り保存会 会長)、室之園晃徳(三島村教育委員)、佐藤央隆(三島村教育委員会事務局)、笹原亮二(本館 教授)
参加費　要展示観覧券(一般580円、特別展をご覧になる場合は一般880円)
※イベント参加費は不要
※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順
※事前申込の方へ、当日11時から本館2階会場前にて展示観覧券を確認後、入場整理券を配布します。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】
▼一般受付　4月1日(月)～30日(火)
※友の会先行受付は終了しました。

みんぱく創設50周年記念企画展

「水俣病を伝える」

熊本県の水俣・芦北地域では、水俣病の教訓を後世に伝えていく活動がおこなわれています。本展示では、こうした活動の意味と課題を考えます。

会期　6月18日(火)まで
会場　本館企画展示場

■関連イベント
創設50周年記念みんぱく映画会

「水俣一揆――一生を問う人々」

土本典昭監督による記録映画を上映します。なぜ彼らは「一揆」をしなければならなかったのか、その背景について解説します。

日時　6月8日(土)13時～16時(12時30分開場)
会場　みんぱくインテリジェントホール（講堂）(定員350名)
解説　吉永利夫(一社)水俣病を語り継ぐ会 理事)
司会　平井京之介(本館 教授)
参加費　要展示観覧券(一般580円)
※イベント参加費は不要
※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順
※事前申込の方へ、当日11時から本館2階会場前にて展示観覧券を確認後、入場整理券を配布します。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】
▼友の会先行受付
4月25日(木)～5月2日(木)
定員80名

お申し込み先
国立民族学博物館友の会（千里文化財団）

▼一般受付
5月7日(火)～6月5日(水)

「水俣一揆」©1973青林舎

創設50周年記念みんぱく映画会

みんぱくワールドシネマ「GAGA――ハヨンの家族」

台湾の原住民族のひとつタイヤル族のハヨン家の人びとが、慣習（ガガ）を守りつつ、長老の死や村長選挙をめぐって、一度は壊れた一族の絆を結びなおしてゆく姿を描きます。

日時　5月25日(土)13時30分～16時10分(13時開場)
会場　みんぱくインテリジェントホール（講堂）(定員350名)
上映作品　「GAGA／哈勇家」
解説　野林厚志(本館 教授)
司会　菅瀬晶子(本館 准教授)
参加費　要展示観覧券(一般580円)
※イベント参加費は不要
※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順
※事前申込の方へ、当日11時から本館2階会場前にて展示観覧券を確認後、入場整理券を配布します。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】
▼友の会先行受付
4月15日(月)～19日(金)定員80名

お申し込み先
国立民族学博物館友の会（千里文化財団）

▼一般受付
4月22日(月)～5月22日(水)

「GAGA――ハヨンの家族」

みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）のワークショップ

点字体験ワークショップ

日時　4月13日(土)、5月11日(土)12時～15時30分(最終受付15時)
会場　本館1階エントランスホール

国立民族学博物館 広報・IR係
電話　06-6878-8560（9時～17時、土日祝を除く）　FAX　06-6875-0401
お問い合わせフォーム https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form/

※申込不要、参加無料、当日随時受付

あそびの広場2024

「みんぱくをあそぼ！」

日時　5月5日(日・祝)10時～16時終了予定
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付

みんぱく創設50周年記念国際シンポジウム

海域からみる人類の文化遺産

日時　5月11日(土)、12日(日)10時30分～16時30分(両日10時開場)
会場　みんぱくインテリジェントホール（講堂）(定員350名)
趣旨説明　小野林太郎(本館 准教授)
国内外で活躍する計14名による発表(日英での同時通訳あり)
第1部　有形文化遺産の現状と博物館
第2部　オセアニアのカヌーと文化復興
第3部　樹皮布とカジノキ――起源・伝統・アート
主催　国立民族学博物館
共催　NIHUグローバル地域研究推進事業「海域アジア・オセアニア研究」

【申込期間】
5月2日(木)17時まで
※事前申込制、先着順、参加無料
※オンライン(ライブ配信)でもご参加いただけます(定員500名)。
詳細は二次元コード(QR)から

お問い合わせ先
シンポジウム事務局
(千里文化財団)
50thsympo@senri-f.or.jp

本館展示のリニューアル

南アジア展示場が一部リニューアルしました。新しくなった展示をぜひご覧ください。

みんぱくゼミナール

会場　みんぱくインテリジェントホール(講堂)
※定員400名
※事前申込制、先着順、参加無料
※当日参加受付あり（定員80名）

第544回
4月20日(土)13時30分～15時(13時開場)
日本の仮面
講師　笹原亮二(本館 教授)

【申込期間】
▶一般受付　4月17日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。

第545回
5月18日(土)13時30分～15時(13時開場)
東南アジアの仮面
講師　福岡正太(本館 教授)

東南アジアでは仮面を用いた芸能がさかんです。写真と映像により、みんぱくが所蔵する東南アジアの仮面を概観し、ジャワ島を例に仮面芸能とその芸能にたずさわる人びとについて紹介します。

【申込期間】
▶友の会先行受付
4月15日(月)～19日(金)(定員80名)

お申し込み先
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)

▶一般受付　4月22日(月)～5月15日(水)

西ジャワの仮面舞踊（2014 年）

みんぱくウィークエンド・サロン――研究者と話そう

会場　本館展示場(ナビひろば)、企画展示場など
※定員なし（ご自由に参加いただけます）
※申込不要、要展示観覧券（一般580円、特別展をご覧になる場合は一般880円）
※イベント参加費は不要

4月21日(日)14時30分～15時
特別展「日本の仮面」を巡って
話者　笹原亮二(本館 教授)

4月28日(日)14時30分～15時
水俣病を伝える
――水俣病センター相思社の事例から
話者　小泉初恵((一財)水俣病センター相思社職員)、平井京之介(本館 教授)

5月5日(日・祝)14時30分～15時
八朔太鼓踊りとメンドン
話者　福岡正太(本館 教授)

友の会
講演会・セミナーへのお申し込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

お問い合わせ先　国立民族学博物館友の会（公益財団法人千里文化財団）
電話　06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）　FAX　06-6878-3716
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp　https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

友の会講演会

参加形式
①本館第5セミナー室(定員90名)
②オンライン
友の会会員：無料
一般(会場参加のみ)：500円
※事前申込制、先着順
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第547回　4月6日(土)13時30分～15時
ベトナム中部高原のゴング文化
講師　柳沢英輔(京都大学 特任助教)

ゴングは東南アジア各地で宗教的な儀礼の際に演奏される神聖な楽器です。ベトナム中部高原では、先住少数民族がゴングセットを受け継ぎ、村落の儀礼・祭礼において演奏に使用しています。本講演ではゴングがどのように作られ、調律され、演奏されているのかについて、現地で撮影した映像や録音をご紹介しながら解説します。

第548回　5月4日(土・祝)13時30分～15時
仮面とわたし
講師　吉田憲司(本館 館長)

大学へ入学した年から始めた仮面をめぐるフィールドワーク。今年2024年でちょうど50年越しの仮面との付き合いになります。日本国内から始まった仮面の探究は、アフリカへ、そして、アジア、アメリカ、ヨーロッパへと広がっていきました。その原点はどこにあったのか。そして、その到達点は？わたしの仮面研究の軌跡をたどります。

※講演会終了後、講師が担当した資料を中心に、本館展示の見学会をおこないます。（事前申込制、要会員証もしくは展示観覧券）

ご入会キャンペーン2024

期間中、正会員に新規ご登録いただいた先着20名の方に、みんぱくの資料を描いた絵札がモチーフの「民族学いろはかるたキャンバスバック」をプレゼントします！

キャンペーン期間　4月30日(火)まで

推しコレ図鑑

鳥が居る

樫永 真佐夫（かしなが まさお）　民博 教授

なぜ鳥居？

「これぞ、鳥居！」

タイ、ラオス、中国雲南省の山地に深く分け入り、アカの村の入り口にこれが立っているのを見ると、誰もがそう思う。なにしろ2本の立ち柱の上に笠木（かさぎ）が渡っているばかりか、その上に木彫りの鳥たちまで並んでいるのだから。笠木にいつも鳥がいるとは限らない日本の鳥居とは大ちがいである。

実際、鳥居の起源を、アカをはじめとするチベット・ビルマ語系やタイ・カダイ語系ほか、多数の民族が雑居する東南アジア北部に求める文化史家もいる。だが定説はない。そもそも鳥居と鳥の関係からしてよくわからないからだ。鳥居研究を概観した稲田智宏（いなだ ともひろ）によると、この日本語が文献にはじめてあらわれるのは記紀編纂（へんさん）から200年を経た10世紀、と寺社の歴史に照らして比較的新しい。またなぜ鳥居とよぶのかについても諸説紛々（しょせつふんぷん）あり、結論できないからだ。

ヤダとミタ

さて、この門柱はアカの村で、焼畑に稲を播種（はしゅ）する直前4月ごろに男たちが立てる。毎年立てるので、何本も縦列していることがある。お稲荷さんの参道みたいだが、彩色はしないし、後ろのものほど傷んでいる。

鳥居にしばしば注連縄（しめなわ）がかかっているように、アカの門柱にも竹へぎを輪にして連ねた類似物が付いていることがある。さらに柱の傍らに、ヤダとミタという男女2体の祖先の木像が置かれることもある。2体とも裸で性器まであらわ。生殖による一族の再生産の意味だろう。この祖先たちが天上の霊的世界と地上を行き来する乗り物が、笠木にとまっている鳥だ。

日本にも鳥居の注連縄に「鬼の目」という邪視よけを吊（つ）るす地域もあるが、アカの門柱にも細い竹へぎを組んで作った呪標タ・レオがついている。つまり、この門柱は災厄の侵入から村を守る結界なのである。

もっとも、アカの門柱も地域と時代による変異が大きい。だからわたしもこれまでラオス北部でアカの村を5つ訪ねたが、ヤダとミタのある門柱を「やだ〜、見たことがない」。

アカの村の門柱（ラオス ルアンナムター県、2019年）

門柱
標本番号｜H0121887
地域｜タイ
展示場｜東南アジア展示場

✦ 推しコレポイント ✦

つぶらな瞳がキュート！
門柱によって鳥の数、大きさ、形はさまざまである。
展示場の門柱にはハトっぽいのと、カラスっぽいのがいて、足は一本、目が丸くくりぬいてある。

肌さむい収蔵庫

すえもりかおる
末森 薫　民博 准教授

12℃と18℃

「さぶっ」。身構えないで入るとこごえる場所が民博にはある。フィルムやテープなど民博が収集してきた映像音響資料を保管する収蔵庫だ。年間を通じて摂氏一二度あるいは一八度と低い温度で管理されている。

一九九六年、民博は第七展示棟(言語、南アジア、企画展用の展示室が入る建物)を増設し、その一部に映像音響資料専用の収蔵庫を設置した。一二度で管理する収蔵庫は比較的狭く、民博が独自に制作した番組の原版となるフィルムなど限られた資料を保管している。一方の一八度の収蔵庫では、アナログからデジタルまで、さまざまな記録媒体の資料を保管している。一インチのオープンリールやUマチック(U-matic)、ベータカム(Betacam)など、今ではお目にかかる機会の少ないメディアも多数含まれており、音声や映像を記録してきた営みの歴史を垣間見ることができる。メディアによっては再生する機械が手に入らなくなってきているため、そのデジタル化は急務な課題だ。

ビネガー・シンドローム

「つーん」。長らくしまわれていたフィルムをあけると、お酢のような鼻を突く香りを感じることがある。フィルムベースの素材によっては、空気中の水分や熱と反応することで酢酸が発生し、「ビネガー・シンドローム」とよばれる劣化がおきる。この現象は一度発生すると完全に止めることは難しい。そのため、低い温度、低い湿度の環境で保管することによって発生を抑制しているのだ。肌さむい収蔵庫は、温湿度の変化に敏感な映像音響資料をなるべく長いあいだ保存するために設置された特別な場所なのである。

映像音響資料の管理に当たる職員は、定期的に収蔵庫に入り、フィルムの保存状態をモニタリングしている。酢酸の発生が認められる場合には、他の資料にうつらないように隔離し、酢酸を吸着するなどの対策をとる。音声や映像の記録を継いでいくために、上着をまといながら、肌さむい収蔵庫での地道な作業は続いていく。

上：民博オリジナル番組の原版など、貴重なフィルムを収蔵する摂氏12度管理の収蔵庫(2023年)
下：収蔵庫での作業(2024年)

Uマチック(上)、オープンリール音声テープ(中)、1インチオープンリールビデオテープ(下)

海洋少数民族モーケンの船

鈴木佑記（すずき ゆうき）　国士舘大学 准教授

インド洋の東端に位置するアンダマン海には、一〇〇〇以上の島が浮かぶ。その島々を移動しながら、おもに漁をすることで生活してきた少数民族がいる。モーケン人である。

モーケン人が移動する際に利用してきたのは船であり、古くは彼らの生誕の場所であり、住まいでもあった。そのような船を家船（えぶね）という。通常、家船には一組の夫婦とその子どもたちが暮らす。男性は結婚後、妻方の船に乗り込み、義父母としばらく暮らしながら、義父やその仲間とともにあらたな家船を造る。そして新婚夫婦は新しい船に移り親族から構成される家船集団は大きくなっていく。

モーケン人の伝統的な船、全長約10メートル
（タイ スリン諸島、2007年）

長年、船が「家」であったモーケン人だが、徐々に「陸上（おかあ）がり」するようになった。一九八〇年代以降、アンダマン海のタイ側では、モーケン人が生活してきた島とその海域が次々と国立公園に指定され、木材伐採が自由に行えなくなった。モーケン人の住まいであり移動手段でもある船を造るのが困難になったのである。そして各地に暮らすモーケン人は特定の島の入り江に恒久的な家屋を建てるようになった。

本土で購入した木材で小型船を造るモーケン人
（タイ スリン諸島、2018年）

現在、モーケン人が伝統的な船を造ることはほぼない。木材伐採の厳しい取り締まりだけが理由ではない。大きなきっかけは二〇〇四年末に起きた、インド洋大津波にある。津波により船を失ったモーケン人に対して、国内外の支援団体がタイで一般的にみられる漁船を寄贈するようになったからだ。さらにその後、材料を本土で購入し、零細漁民が用いる漁に特化した小型船を自分達で造るようになり、かつての伝統船を造る者はいなくなってしまった。今では長距離移動時には漁船、村落周辺海域で漁をおこなう際には小型船を用いる。

伝統船の喪失は、船造りに必要な樹種の知識や伐採儀礼、それに丸太の運搬や刳（く）り抜きといった共同作業が失われることを意味する。数百年と続いてきた伝統船造りをやめたモーケン人は、乗り物との関係性だけでなく、社会そのものを大きく変えつつある。

だって調査だもの

一九九七年夏、パレスチナ往還記

菅瀬晶子（民博准教授）

ヨルダン川の国境で詰む

一九九七年七月下旬。東京外大の博士前期課程の大学院生だったわたしは、ヨルダン川の国境で、途方に暮れていた。

パスポートには、一旦押されたイスラエル入国のスタンプの上に、無慈悲に引かれた赤ボールペンの二重線。その上から、さらに「入国拒否」のスタンプが押されている。くちゃくちゃとガムを噛み、横柄な口をきく入国管理員に、なんでこんな仕打ちを受けねばならないのか。

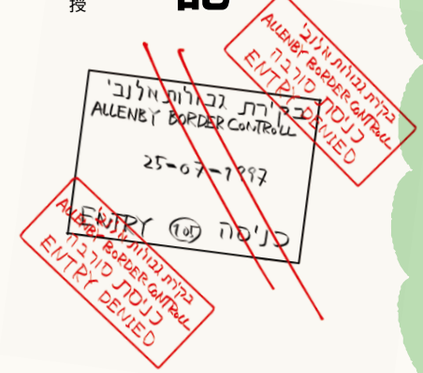
後で考えれば、理由は簡単であった。当時わたしはパレスチナ自治区内のヨルダン川西岸地区（通称西岸）にあるビールゼィト大学に自費留学中。イスラエル政府はパレスチナに留学する外国人に就学ビザを出さないので、イスラエルの観光ビザを再入国で更新するため、もっとも近い隣国である、ヨルダン川東岸にあるヨルダンの首都アンマンに出てきた。持ち物は少なく、所持金は五〇〇ドルのみ、日本に帰国する航空チケットも持っていない（寮の引き出しに置いてきた）。どう見ても、不法労働者にしか見えなかったのである。

イスラエルに入国できなければ、当然西岸にも帰れない。アンマンに戻ってすぐ、わたしはビールゼィト大学のオフィスに電話をかけた。すると、アンマンにある大学の連絡事務所で在学証明を取れば、入国できるという。さっそく在学証明を手に、再度ヨルダン川の国境に向かったが、結果はパスポートに入国拒否のスタンプが増えただけであった。ビールゼィト大学は、反イスラエルの学生活動家を多く出している。よく考えれば、不利な条件が増えるだけであった。

日本大使館にも相談したが、お茶濁しにステーキを奢られ、やんわりと帰国を勧められた。

上：ビールゼィト村から大学への道。日々歩いて通った。ビールゼィトはキリスト教徒が優勢の村である
下：ビールゼィト大学。村の女性篤志家によって設立された女子校が大学の前身である
（ヨルダン川西岸 ビールゼィト、1997年）

大学の寮。キリスト教徒の姉妹2人、イスラーム教徒の3人とここで9カ月を過ごした。キリスト教徒の姉妹とは、親しい友人になった
（ヨルダン川西岸 ビールゼィト、1998年）



パスポートに押された入国拒否のスタンプ（筆者再現）

キリスト教徒の子どもの洗礼は、最近は個別におこなわれることが多いが、本来は聖霊降臨祭にまとめておこなわれていた。
このように、芋の子を洗うように洗礼を授ける光景は、いまのところここでしか見たことがない（エジプト ミート・ダムスィース、1997年）

「東京外大の院生さんなんでしょ？別にパレスチナに執着しなくても」。大嫌いなステーキはゴムみたいで、わたしはひそかに怒りに燃えた。わたしの調査対象は、パレスチナの聖ゲオルギオス崇敬。一一月には大祭もある。それまでになんとしてでもイスラエルに再入国し、調査を再開してこいつらを見返してやる。しかし、どうやって？

それからまる一カ月、わたしはアンマンの安宿で、無為に日々を消すことになる。

カイロで一発逆転を果たす

くすぶるわたしに希望の光をくれたのは、当時エジプトのカイロ大学に留学中の先輩Yさんだった。パレスチナに遊びに来て、わたしが入国拒否を受けたことを知り、宿に電話をくれたのである。彼女がカイロに帰るのを見計らって、わたしもアンマンからカイロに飛んだ。そしてカイロの日本大使館でパスポートを新調し、イスラエルに再入国を果たして、ビールゼィト大学の女子寮で友人たちと涙のハグを交わした。

さながら牢獄だったアンマンの一カ月に比べると、カイロでの二週間は夢のようだった。ナイル・デルタの村で、聖ゲオルギオスのマウリド（殉教祭）が開かれることをYさんから聞き、二人で出かけたのは、まさに怪我の功名的な僥倖であった。その後パレスチナで見た大祭とはあきらかに異なる、エジプトの熱狂に満ちたマウリドの空気は、今でも忘れがたい。ヨルダン川の国境での押し問答と不愉快な助言とともに、電話でのYさんの一声、子どもの洗礼を喜ぶ母親たちの笑顔、そして男性の腕に聖人像を彫る刺青師の真剣なまなざしが、昨日のことのように思い出されるのである。

運転手など肉体労働に従事するキリスト教徒男性は、守護を得るために聖人や聖母子の姿を刺青師に依頼して腕や背中に彫ってもらう。このときは聖ゲオルギオスが彫られていた（エジプト ミート・ダムスィース、1997年）

「カツオの狩人」の世界に迫る船上めし

若林 良和（わかばやし よしかず）　愛媛大学 教授

「カツオの狩人（かりゅうど）」。大海原で、カツオを追い求め、発見すれば活餌（いきえ）のイワシを投げ入れて漁船へ誘引し、竿（さお）で一気に釣り上げる人たちを、わたしはこうよぶ。カツオ一本釣りは豪快で勇壮な伝統漁法だ。わたしはオキ・海上にいる視点から、彼らの世界を探究すべく、漁船単位で営まれる社会を「漁撈（ぎょろう）集団」、その生活サイクルを「海上生活構造」ととらえ、カツオ漁船への乗船フィールドワークをおこなっている。その糧となる船上めしを素描しよう。

まず、船上めしにありつくには、船酔いの克服が必要だ。漁船では縦揺れと横揺れが常時、不規則に発生する。慣れもあるが、体調を整えて乗船しても、嘔吐（おうと）で胃が空っぽになり胃液混じりの唾液が込み上げ、胃痛に苦しむような重症に陥ることもある。そのとき、調理場から炊き立てご飯の香りが漂ってくる。本来ならここで食欲が増すはずだが、わたしは妊婦さんのツワリのごとく、鼻をつまんで避けてしまう。

次に、船酔いを克服すると、至福のときが訪れる。というのも、釣りたてのカツオの刺身を堪能できるからだ。新鮮なカツオはプリプリ・モチモチの食感で脂がのり、さっぱりとした旨味がある。マヨネーズ醤油（じょうゆ）で食しても絶品だ。カツオ漁船にはマヨネーズ好きが多く、わたしもそんなマヨラーのひとりである。カツオの生食は、カツオ一本釣りとともに、乗船フィールドワークの醍醐味（だいごみ）だ。

ただ、カツオの刺身をゆっくり堪能している時間はない。カツオの群れは気まぐれだ。ひとたび、釣りが始まると、戦場と化した船上では食事どころでなくなる。早飯のわたしも、漁船員を見習って立ったままで茶漬けにしたカツオを流し込むが、彼らのスピードには到底かなわない。入れ食い状態が続けば、絶食を余儀なくされ、漁獲最優先というカツオ漁船の宿命を実感する。

同じ釜の飯を食べ、帰港前に釣果の祝杯をあげることで、わたしは、現場・現物・現実を重視する「3現主義」をモットーに「カツオの狩人」と一体化して、彼らの世界に迫っている。

上：カツオ漁船でのフィールドワーク。釣果・大型カツオに満悦の筆者（沖縄県、2014年、中村良三撮影）
下：カツオ漁船・トモ（船尾）での食事風景（高知県、2015年、林勇作提供）

月刊みんぱく 2024年 4月号

第48巻第4号通巻第559号　2024年4月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発 行 人　園田直子
編集委員　樫永真佐夫（編集長）　河西瑛里子
黒田賢治　島村一平　中川理　松本雄一
制作・協力　公益財団法人 千里文化財団
印　　刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係にお願いします。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。

ミックス紙 FSC® C013678
VEGETABLE OIL INK
GREEN PRINTING JFPI P-B10282

『月刊みんぱく』は国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読のほか、友の会会員の方には毎月お届けします。

『月刊みんぱく』定期購読
本誌を1年間お届けいたします。年間をとおして、いつからでも始められます。

お問い合わせ

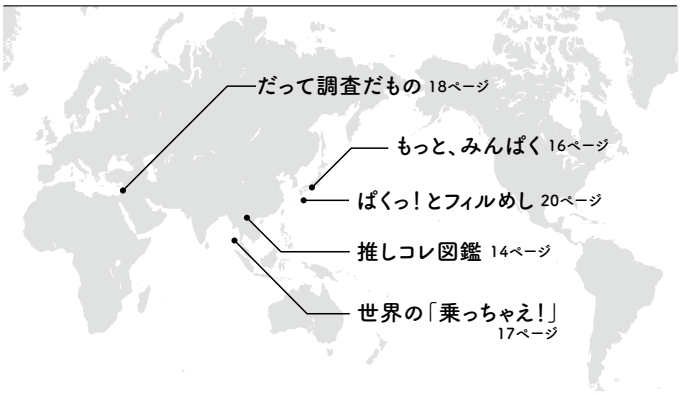
国立民族学博物館友の会
みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。本誌送付のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会（千里文化財団）までお問い合わせください。
電話 06-6877-8893（平日9:00〜17:00）

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

友の会

今月号の地図



編集後記

表紙には奄美（あまみ）の伝統芸能のお面をドーンともってきた。コミカルで親しみやすいお顔が、いかにも福をもたらしてくれそうだからである。現物も紙製でほぼ実寸大なので、表紙から切り抜き、両目の部分に穴をあけ、輪ゴムで耳にかけてかぶってみるも良し。いつもとちがう自分になった快楽をきっと味わえることだろう。

「え、仮面ならいつもかぶってるって？　しかも、いくつも使いわけてる？　そっか、スペル・デルフィンさんでしたか。え、ちがう！？　大人になるってそういうこと、ってか。はぁ……」

違う存在になるために顔を隠すのが仮面だとすると、観光地などでよく見る「顔ハメ看板」は顔だけ露出させる、いわば逆仮面。しかし、これだと仮面ほどの変身は実感できない。身体による所作が表現できないからだろうか。これと仮面との関係が気になるが、その発祥はアメリカとも聞く。（樫永真佐夫）

次号の予告 5月号

特集「母の日」（仮）

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

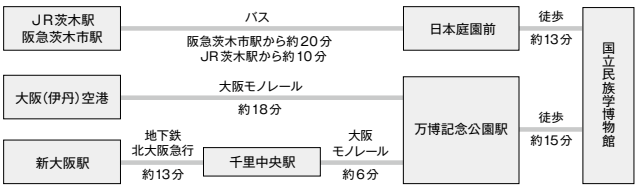
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1　電話 06-6876-2151

開館時間　10:00〜17:00（入館は16:30まで）

休 館 日　毎週水曜日（水曜日が祝日の場合は直後の平日）
年末年始（12月28日〜1月4日）

観 覧 料　一般 580円／大学生 250円／高校生以下 無料
特別展の観覧料金は、その都度、別に定めます。
※観覧料割引についてはホームページでご確認ください。

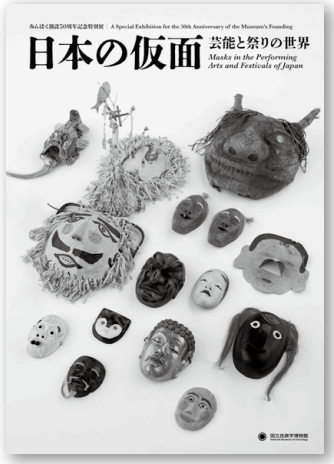
主要ターミナルからのアクセス
本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ
https://www.minpaku.ac.jp/

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

特別展図録・オリジナルグッズのご案内



2024年3月28日発売

みんぱく創設50周年記念特別展図録

『日本の仮面—芸能と祭りの世界』

国内各地には、仮面がさまざまなかたちで用いられ、重要な役割を果たしている芸能や祭りが伝えられています。本著では約600点の日本の仮面をカラー写真で掲載。書き下ろしエッセイ6篇も収録。多様性に富む日本の仮面のあり様を紹介します。

編者：笹原 亮二　発行：国立民族学博物館
本文192頁　A4判　ISBN：978-4-910055-12-1

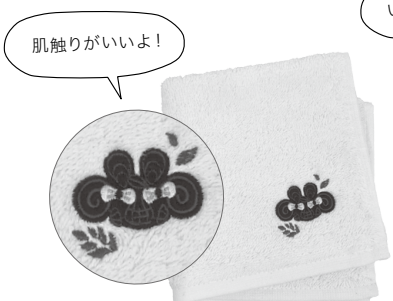
定価 2,090円（税込）

※商品イメージ

ピンズ

鹿児島県・硫黄島の「硫黄島八朔太鼓踊り」のメンドンがピンズになりました。

定価 850円（税込）



タオルハンカチ

オーガニックコットン使用。肌触りのよいタオル地にメンドンのワンポント！

カラー：オフホワイト
素材：綿 100%

定価 1,122円（税込）

みんぱく創設50周年記念特別展

日本の仮面
——芸能と祭りの世界

会期：2024年3月28日（木）～6月11日（火）
場所：国立民族学博物館 特別展示館

お問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ　E-mail shop@senri-f.or.jp　水曜日定休
オンラインショップ「World Wide Bazaar」　https://www.senri-f.or.jp/shop/

オンラインショップ

オンラインショップ「World Wide Bazaar」でAmazon Pay（アマゾンペイ）が使えます。

ただし、国立民族学博物館友の会会員の方の会員割引につきましては、Amazon Pay をご利用の場合は適用できませんので、あらかじめご了承ください。友の会会員割引の適用を希望の場合は、会員番号をお知らせいただくとともに、お支払い方法を郵便振替・銀行振込を選択ください。